

中原中也

◎特別寄稿

2007年、チュウちゃんに聴く 長谷部奈美江
生誕百年を迎えて 西村正伸

生誕百年記念事業紹介・記念グッズ紹介

◎常設テーマ展示

「中原中也とフランス文学」

◎特別企画展示

「青山二郎と中原中也」

◎新収蔵資料紹介

小林秀雄『ランボオ論』

『神保光太郎宛・松田利勝宛はがき』

◎エッセイ

「詩集の記憶」 水無田気流

◎企画展示ピックアップ

「中原中也・詩の情景／絵画の情景

あゝ？—山根秀信展」

「日本のダダ」

国民文化祭を終えて

主なできごと(平成18年度 行事記録)

第12回中原中也賞受賞作品

平成19年度行事予定



*Chuya Nakahara
Memorial Museum*

中原中也記念館
館報2007

12

Public relations magazine
第12号

こないところがあるの？
ここにこのまま眠ってればやすらかなんだけど、でも、今日は少しだけチュウちゃんをかせてあげる。

チュウちゃんは、一九〇七年四月二十九日、中原医院を営む中原政熊・コマ夫妻の養女フクさんと陸軍軍医謙助さんとの間に生まれた。結婚七年目にしてはじめて赤ちゃんだったから、チュウちゃんはいそがしうみなに可愛がられた。チュウちゃんもその期待を裏切らないお勉強のよくてできる、習字のうまい子だった。

ところが、山口中学三年の時に落第した。チュウちゃんは、後年、謙助さんがあんまり勉強、勉強とやかましく、蟻地獄のような家庭生活だったから、答案を粗略にしてわざと落第したって言うんだけど、どうだかね。家庭教師を頼んでもいっこうに成績は上がらず、フクさんには「ぼくは勉強せんけど、落第だけはせんから安心してらっしゃい」って言ってたチュウちゃんのもの。

それにチュウちゃんだってよくしってるけど、謙助さんは子煩悩なひとだよ。

チュウちゃんが、父は自分の小さい頃から外へはできる限り出さなかったとか、外から来る子供は下層民の子供だって、大抵は追い出したなんていうから、なんてひどいオヤジさんかと思っちゃうけど、謙助さんは、それだけのひとではなかった。

謙助さんは、陸軍軍医だけど、あの頃はまだ身分差別がはっきりあったから、大学を出ていなくて、士族でもない謙助さんは、いろいろ苦労した。謙助さんは、中原家が士族で、自分が農民の出であることをたいそう気にして、名籍上、中原家より格上の姓に入籍した

ことすらあった。だから、チュウちゃんは、柏村中也になったこともある。だけど、謙助さんは、山口県で最初のラジウム治療をおこなったり、政熊さんに負けず劣らず医院を盛り立てていたんだ。今で言うなら、りっぱなノンキャリアってところかな。だから、チュウちゃんには、いっぱい勉強していい大学に入って欲しかったんだよ。

だけど、たしかにチュウちゃんには、重荷だったかもしれないね。チュウちゃんは、京都へ移るとそりや自由になって、本を取り上げられることもないし、好きなところへ出入りもできるし、十七歳の時は、二十歳の長谷川泰子さんと恋にも落ちた。でもね、ただ字面をおもしろがるようなだけの泰子さんを、自分の詩の良き理解者と思いつくようなところがチュウちゃんにはあって、そのうちうまくいかなかった。

チュウちゃんは、あんまりひとと上手につきあえるひとではなかったかもしれない。なにしろ、三度の飯より詩がすきで、なんでも眺めたがる。チュウちゃんの眺めたがり屋はうまれつきのもので、傍観者なんてものじゃない。それこそどこまでもどこまでも突き通して眺めてしまうふしぎな音律を放つ瞳。そいつはチュウちゃんのからだの中にまでも入ってしまう。

チュウちゃんには、天気の話や野球の話と違ったどうでもいい話をするのがとても狡猾に思える。チュウちゃんにはそんなことを話す時間ももたない。友達と思えば思うほど、魂そのものの言葉しかチュウちゃんにはなくなってしまうんだ。



大正9年、中也が山口中学1年の頃の写真。書生や看護婦、車夫や女中なども一緒に写っている。当時、家族10人、従業員8人と合計18人で、母フクによると、中也は大家族のなかであって、ひじょうに人間の気持をつかむことが敏感な子だったという。

特別寄稿 | Special contribution | I

7年、 うちに聴く

長谷部奈美江

text=Namie HASEBE

だけど、みんなはそんな抜き差しならない関係なんてごめんだ。世の中で無邪気なひとは愛されるけど、チュウちゃんの無邪気さは愛されないものかもしれないね。

生活と芸術との間で、チュウちゃんはずいぶん苦しんだ。チュウちゃんは、飯を食うというのをけっして馬鹿にしてはいなかったからね。

だけど、チュウちゃんの詩は、書ける時に書く仕事で、普段は結局他人の作品を読んで勉強するしかなく、傍目からみれば、それは完全な怠け者だった。とくに詩なんぞあってもなくても関係ないひとたちにとっては、いかにチュウちゃんが詩に対して良心的に生きようと、虫がよいだけ。チュウちゃんは、チュウちゃんの詩を理解してくれない人たちがいちいち無視できなくて傷ついてしまう。

こうして、チュウちゃんの神経はずたばろになり、追いうちをかけるように文也ちゃんの死まで重なって、とうとう療養所に入れられることになった。療養所の暮らしはとてもおそろしい。看護人の暴行がある。すべての手紙に院長の検閲が入る。おいそれとは家族にも会えなかった。

だけど、チュウちゃんはやっぱりチュウちゃんだった。ある時、その小父さんと二人、山の掃除をするようになった。チュウちゃんってひとは、元來庭を掃いたりすることが嫌いでなく、なんだか夢のように嬉しかったらしい。火鉢を挟んでお牛御飯を食べるだんになって、「こんな熱い茶は久しぶりだア」と小父さんが言うとなんともいえない嬉しそうな顔をしたりして……

チュウちゃんの周りのひとはすごかったな。

チュウちゃんの実のおばあちゃんのスエさんは、その当時英語が堪能な中原家の長男助之さんと結婚したけど、早くに死なれ、フクちゃんを助之さんの弟政熊さんの養女に出して再婚すると、そのひとも死なれ、結局養女に出した実の子の子守役として中原家に雇われる。

チュウちゃんが落第した時は、みんなが消沈しているのに、このスエさんだけが「これ位のこと何です」と平然と言っていた。牛を食べることを嫌い、牛乳は胸につかえると生生涯嫌なまなかつた。好物は腐りかけた蜜柑や菓子。

スエさんは実力行使のひと。孫たちがイタズラをしようものなら、大外刈で放り投げた。でも、孫たちは誰もカスリ傷ひとつうけなかつた。だって、大事な孫たちが頭から落ちないようスエさんは手でささえ、ふあつと投げたやつてたんだもの。

スエさんは強いひと。ガンになっても苦痛をいっさい外に見せず、キッチンと着物をきて端座した。それでも死ぬ間際、「フランス、フランス」とつぶやきながら、チュウちゃんの行く末を案じてなくなつた。

育てのばあちゃんコマさんも、強烈な女のひとだった。笑いながら生まれ、笑いながら死んだといわれる政熊先生と、その当時に恋愛結婚。ひとたびカトリック信者になると、中原家の位牌や仏具を焼き捨て、仏壇をとりのけてしまう徹底ぶり。政熊さんは入信してもけっしていいかげんな信者だつたけれど、コマさんのは本式だね。だけど、そのコマさんが、死に際になって、寝る間も離さなかつたロザリ

オをボンと放り投げてしまうんだ。

そういうひとたちに育てられたのが、チュウちゃんのおかあさんのフクさんで。

フクさんは、おとうさんの助之さんのことが自慢だつた。生活的には裕福ではなかつたけど、おとうさんが英語が話せて、友達の誰も知らないオルガンやピスケットのことをしているのが内心得意だつた。

お茶のお免状だつて持っていたし、成績だつて抜群。だけど、おとうさんと死に別れ、スエさんとは生き別れ、どうしようもなくかなしいことも多かつた。それに「ヤソの子」とずいぶん女学校ではいじめられたりしたしね。でも、なぜかフクさんというひととはふしぎな明るさを持っていた。何人の人を見送つても、その明るさは生涯変わることがなかつた。

なんか整備されすぎた今の世の中からすると、中原家のひとはみなハミダシまくりのひとに見えるかもしれない。でも、その当時のひとたちにとっては、そんなに特別な生き方でもなかつたんじゃないかな。ただ、チュウちゃんは、こういうひとたちに囲まれて生きていた。そのひとたちのどれくらいをチュウちゃんがしっていたのかしらないけれど、そのひとたちの後ろ姿だけはずつと見ていたと思う。

そういうチュウちゃんが、詩に生きるって

どんなことだつたんだろう。

チュウちゃんも、子煩悩だつた。

文也ちゃんが犬店の犬を面白がるというては日記に書いたり、肩車して権現山に連れ出したりした。よく子守をした。

だけど、あれはないんじゃないかな。「文也も詩が好きになればいいが」なんて。二代がかりならかなりなことができて、チュウちゃん蔵書を読めば、書き込みだつてたくさんあるから詩道修行には十分間に合うだなんて。少しこわくない？

チュウちゃんの詩を2007年の今読んでくれるひとがどれくらいいるんだろう。チュウちゃんは、そのひとたちのことをどう思うのだろう。チュウちゃんは理解されるのが嫌いだつた。そして、愛情のない学者は嫌いで、感情教育も嫌い。赤ん坊も嫌いだつたけど、天才の赤ん坊はいんだっけ。学生も嫌いで、暇だの蟹だのと言っていたよね。だけど、彼らの中に2007年ギター片手にチュウちゃんの詩を歌つてる子たちがある。

チュウちゃんが2007年を生きていつたかどうか、百年目の、百歳のチュウちゃん。

《参考》『新編中原中也全集』(角川書店)

200 チュ

ゆつくりするつしりて

おいで下さい。

特別寄稿 | Special contribution | II

生誕百年を 迎えて

text=Masamobu NISHIMURA

生誕百年記念事業実行委員会委員長

西村正伸

「奇蹟の子」・中原中也は明治40年（1907年）この世に生を受けました。両親が結婚して7年目にして初めて授かった子であり、中原家としては45年ぶりの男子誕生であったから、カトリックの洗礼を受けていた養祖父政熊はそう言って中也の額に十字を描き、大変喜んだそうです。

そして今年、平成19年（2007年）。生誕百年の記念すべき年を迎えました。生前、一つの詩集と三つの翻訳詩集しか出せなかった中也ですが、詩人としての才は素晴らしく30才の若さで亡くなってから、新たに「詩人 中原中也」として生まれ変わったように、年を重ねるたび世間の注目を集めるようになりました。

振り返ると、昭和13年（没、翌年）、第二詩集『在りし日の歌』出版。同14年「歷程—中原中也追悼特集号」。戦後混乱期の同22年（没後10年）『中原中也詩集』発刊。以後、毎年のように、「中也」の冠された本が出版され続けています。そして昭和40年6月、地元待望の詩碑が生家近くの高田公園（井上馨侯屋敷跡）に建立されました。建設にあたっては、当時の兼行恵雄山口市長が奔走され、友人大岡昇平、河上徹太郎、小林秀雄、今日出海が長い関心の底に溜めていた思いを果すため、力を出したと言われます。その碑文を大岡昇平は次のように残しています。

「中原中也は明治四十年四月二十九日この地に近い湯田横町に生れた。その卓れた詩才は原立山口中学校に在学中から現われてゐたが昭和九年詩集『山羊の歌』が東京で出版されるに及び広く詩を愛する人々に認められるに到った。不幸病を得て、同十二年十月二十二、日第二詩集『在りし日の歌』の上梓に先立って、鎌倉の寓居に

没した。その名声は死後ますます高く日本近代詩史に揺ぎない地位を占めてゐる。

この度山口市長兼行恵雄の斡旋により、同郷の有志、東京の友人ら相寄り、こゝに詩碑を立て、その詩業を記念することにした。碑表の文字は詩篇『帰郷』より取られ、友人小林秀雄が書いた。」

ともあれ、山口へ帰る意を固めながら果たせなかつた中也の28年ぶりの帰郷が実現しました。昭和61年（没後50年）は、記念の特別展（山口市歴史民俗資料館）、講演会「大岡昇平」、絶叫コンサート「福島泰樹」、碑前祭が行われ、NHKも特別番組を制作したり、にぎやかな年となりました。

平成6年、中也の魂の館、「中原中也記念館」の完成です。中也の詩を文学的に深く研究される方々、中也の詩に興味を持たれ少しずつ踏み込んでいこうとされる方々の活動の拠点ができあがりました。その時、開館のお祝いと3年後の生誕90年に向けてのスタートを兼ねて、生誕90—3年祭が挙行され、前年結成された市民団体・平成タタ実行委員会（中也が好んだ「朗読」を通して中原中也の顕彰と地域活性化を目指す）が中心的役割を果たしました。翌年から90—2年祭、90—1年祭と続き、同9年、90年祭が盛大に行われ、その後は中也記念館が引き継ぎ、毎年4月29日の中也生誕日には記念館前庭で碑前祭に続き「空の下の朗読会」と題して、一般市民の朗読や歌手や詩人による朗読やコンサートを開催。「中也生誕祭」として多くの方々に親しまれてきたところでございます。平成16年には開館10周年にあたり記念館もリニューアルオープン。来る生誕百年に向け着々と準備が進められて参りました。

そして昨年8月下旬、記念館の呼びかけで平成タタ実行委員会、地元商店街、旅館組合、商工振興会、商工会議所青年部他色々な組織、団体の方が集まり、中也生誕百年記念事業をレールに載せるための検討委員会が発足。前もって実施されていたアンケート結果も参考に、組織、事業内容、広報、予算、タイムスケジュールを審議、事業計画案を作成して11月21日実行委員会に移行、私がお世話役を仰せつかった訳でございます。

中原中也生誕百年記念事業は、中原中也(1907-1937)の生誕百年という節目の年を迎えるにあたって、詩人中原中也という人物像、並びに中也の詩の世界を多くの人々に親しんでもらうことを目的とし、特に中也をあまり知らない観光客や市民に対しても中也に身近に触れることができるような事業、例えば、グッズ開発・販売や、空中ブランコなどのサーカス公演、ミニ詩集の作成、朗読会等を、生誕日である4月29日を中心に湯田温泉まつりからゴールデンウィーク終了までの一ヶ月間、継続して行い、中也生誕百年祭のスタートを切り、さらに来年3月まで約一年間、様々な催しを展開し、中原中也を通じて山口から全国に情報発信をすることに、より多くの人々に山口へお越し戴き交流の輪が拡がり、地域活性化、街づくりにつながることを、期待しております。

プロローグ

中也が温泉好きであったかどうかは分かりませんが、若い頃の合同歌集の自らのパートの題名を「温泉集」とつけていることから、湯田温泉への思いがあったことは間違いありません。その思いに応えるかのように、今年の「湯

田温泉白狐まつり」にサブタイトル、「中原中也生誕百年記念」がつけられることになりました。そしてパレードにも中也が参加することになり……。地元の皆さんが、熱烈に祝福してくれている証です。

オープニング

オープニングは、「湯田温泉白狐まつり」からシフトするように4月8日16時中也記念館前庭で開会セレモニーに続き朗読や音楽コンサートを実施。小室等さん木村弓さん佐々木幹郎さんら多彩なゲストが出演されます。

今回特筆すべきは、地元の皆様の熱意と山口銀行さんのご深慮で、中也記念館前の旧山口銀行湯田支店の建物をお借りできることになり、中也の時代の再現を試みることにしました。実行委員会の中だけでなく、どんな外に輪が広がっていくことは大変嬉しいことです。カフェ・ド・中也、どうぞお楽しみに。

生誕百年前夜祭

生誕日前日の4月28日は前夜祭として市民館大ホールで12回を教えます中原中也賞の贈呈式と併せて、ノーベル文学賞受賞者の大江健三郎さんの記念講演と、息子さんの光さんがこの日のために中也の詩に作曲して戴いた作品の発表会、そして加藤舞踊学院による中也の詩「春日狂想」をテーマにした舞台公演を致します。

空の下の朗読会

毎年の生誕日の恒例となっておりますが今年「中也生誕百年祭」と題し、記念館前庭で4月14日(土)・15日(日)・21日(土)・22日(日)・29日(日)と5回実施。毎回違うゲストを迎えて趣向を変えて行います。29日は、一般参加で

きますので、自作の詩でも好きな詩の朗読でもかまいませんからできるだけ多くの方のご参加をお待ちしています。

サーカス小屋でコンサート

「ゆあーん ゆゆるん」と言う中也の詩でよく知られる「サーカス」にちなみ、中園町の情報芸術センター横に大きなテントを張りサーカス団による空中ブランコ等のサーカスと詩人、歌手によるコンサートを4月29日～5月6日の8日間毎晩18時から開演致します。

中也生誕百年祭ナイトバスツアー

湯田温泉の旅館に宿泊される観光客を対象に、ライトアップされた常栄寺雪舟庭、瑠璃光寺五重塔を拝観し、開館延長した中也記念館を見学するコースで、4月13日(金)・14日(土)・20日(金)・21日(土)の4回運行致します。

演劇ワークショップ十発表公演

俳優イッセー尾形さんによる中也をモチーフとした演劇のワークショップを市民対象に参加者を募集し6月25日(月)～7月1日(日)の間開催致します。

中也記念館の開館時間延長、他

4月8日(日)～5月6日(日)の間、記念館の開館時間を20時まで(最終入館は19時30分)延長して皆さんが来館しやすいように致します。そして4月1日から特別にデザインされた記念館入館券(通し番号付)を限定で発行致します。

生誕百年記念グッズ

実行委員会では①Tシャツ②ハンカチ③ス

トラップ④自由の4部門のデザインを公募し全部で351点の応募がございました。その中から厳正に審査を行い、全部門の中から最優秀賞一点と、各部門より一点ずつの優秀賞として全部門から10点の佳作を決定致しました。そして最優秀賞と優秀賞の作品を記念グッズとして商品化し希望される店で販売をして戴きます。また、湯田地区商工振興会では、足湯で好評の「ゆうたくんタオル」の姉妹品として「中也タオル」を制作販売します。

中也記念館ではレターセット、一筆箋、クリアファイル、カレンダー、等を制作販売。

この他、全国の文学館、記念館の中で、中也生誕百年の企画展を計画して戴いているところがございます。詳しくは記念館までお問い合わせ下さい。

中也は山口の自然が大好きであったと思います。詩の中にも原風景として表れている場所がたくさんあります。そして同じ道の小草を見ても普通の人の何百倍も感度の良い、しかも物の内面を見透せる目で見ると表しています。また、遙か遠い光、将来のことは見る目も持ち合わせていたに違いありません。このように、中也だったら「どのように見たんだろう」「感じたんだろう」と、考えていくと、何だか少しづつ感性が研ぎすまされてくるような気持ちになります。中原中也生誕百年の記念すべき年です。せっかくの機会ですから、山口の皆様も是非中也に近づいて戴き何かを感じ取って戴ければと思います。どうか全国の皆様、さやかに風も吹いている中也の故里、山口へどうぞ「ゆつくりするつもりで おいで下さい」。

これは中也からの本当の「お誘い」のことばです。

記念グッズ 紹介

生誕百年を機に記念館で販売するグッズを新しく開発しました。

デザイナーは、過去に特別企画展示でお世話になったデザイナーのお二人をお願いし、色々なアイデアを出していただきました。

デザイナーは林千代氏と小坂浩氏です。柔らかく可愛いデザインが持ち味の林氏と、シンプルで都会的なデザインが持ち味の坂氏。販売用のグッズだけでなく、受付で押すことのできるスタンプや商品を入れるバッグなどもデザインしていただきました。

生誕百年限定カレンダー

「中也の文字曆」

中也の誕生日4月29日にちなみ、4月始まりのカレンダーです。



記念グッズいろいろ

限定1,000部発行。中也の肖像や原稿、ノート。詩集などの写真と、中也の筆跡をそのまま使った数字で構成。中也にとっての記念日の記載もあります。

絵葉書

屋外展示の詩のパネルのために考えていただいたデザインを中心に、中也の詩の絵葉書を作りました。

「サーカス」「初夏の夜」「秋の夜空」「夏の日の歌」「早春の風」「また来ん春……」「六月の雨」「春と赤ん坊」「月夜の浜辺」「一つのメルヘン」の10種類です。詩についての簡単な解説も付いています。

一筆箋

中也が手紙に書いた文字を野紙に薄く印刷しています。〈前略〉〈拝復〉や〈ではさよなら。中也〉など、最初か最後に中也の筆跡が入ります。縦罫と横罫の2種類。

レターセット

中也の詩のモチーフとなっている、月（湖上）、夕陽（夕照）、バスケットボール（宿酔）、レコード（カフェーにて）、帽子（一つのメルヘン）をイメージした、丸い形の5種のデザインです。折りたたむと四角い封筒になります。封緘シールが付いています。

クリアファイル

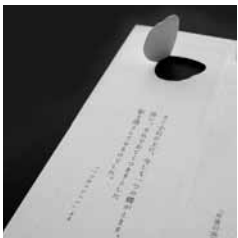
中也の詩の一節を載せたシンプルなデザインです。「一つのメルヘン」「汚れつちまつた悲しみに……」「サーカス」「月夜の浜辺」「四行詩」から抜粋。

ブックマーカー

厚い一枚紙に4種のしおりがデザインされています。切り込みが入っており、自分で型抜きして使えます。「サーカス」「宿酔」「月夜の浜辺」「一つのメルヘン」からの一節が書かれています。

生誕百年限定チケット

30,000枚発行し、4月1日から開始します。通し番号が付いていますので何番目に入館したかがわかります。中也の肖像写真が4枚はいった特別なチケットです。



ブックマーカー



生誕百年限定チケット(見本)

中原中也生誕百年関連展示

県立神奈川近代文学館

「中原中也と富永太郎展 二つのいのちの火花」

日程:2007年4月21日(土)~6月3日(日)

会場:県立神奈川近代文学館

中原中也生誕100年、没後70年の記念の年に、中也とその文学に転機をもたらした富永太郎という二人の詩人に焦点をあてます。大正末の京都で出会い、中也にフランス近代詩を伝えた太郎。そして太郎との緊張に満ちた交友と反発を通して独自の抒情詩の世界を生み出していく中也。会場では、生涯の接点で火花を散らし共に天逝した二人の作品世界を、中原中也記念館、神奈川近代文学館ほかの貴重資料でたどります。

中原中也記念館

「小林秀雄と中原中也」

日程:2007年7月25日(水)~9月24日(月・振休)

会場:中原中也記念館

中原中也を語る上で欠かせない友人、小林秀雄。小林と中也の関係は、時に反発しながらもさまざまな面で互いの精神に深い影響を及ぼしました。本展では、初公開を含む貴重な資料を通じて、日本を代表する評論家と詩人の魂の交流に迫ります。

鎌倉文学館

「中原中也と鎌倉」(仮)

日程:2007年10月6日(土)~12月16日(日)

会場:鎌倉文学館

中原中也が鎌倉で没してから70年。その30年の軌跡を、鎌倉時代を中心に振り返ります。

展示



中原中也生誕百年祭2007事業紹介

今年は、中原中也生誕百年の年として年間を通じて様々なイベントが開催されます。

現在予定されているイベントをご紹介しますが、今後も全国各地で

中也のお誕生日をお祝いする企画が立ち上がることを期待しています。

「空の下の朗読会」

毎年、中也の誕生日に記念館前庭で開催。詩の朗読を好んだ中에도にない、自作の詩や愛読の詩を朗読していただきます。今年は例年と少し形を変え、4月8日から29日にわたりイベントを開催します。

会場：中原中也記念館前庭

(雨天の場合は記念館向かいの特設カフェで開催)

4月8日(日) 16:00開演 「オープニングコンサート」

出演：小室等・木村弓・佐々木幹郎

4月14日(土) 13:00開演 「詩のボクシング山口大会予選会」

出演：一般申込者

4月15日(日) 16:00開演 「Divaたちの中也」

ゲスト：茶木みやこ・べすば・林木林・折田成子

4月21日(土) 16:00開演 「子供たちによる中也」

ゲスト：下関朗読詩の会 「峡」

4月22日(日) 16:00開演 「Actorたちの中也」

出演：交差転プロジェクト(九州)・集団：歩行訓練(山口)

4月29日(日・祝) 14:00開演 「中也生誕祭」

出演：おおたか静流・和合亮一 ほか

中原中也賞贈呈式&中也生誕百年前夜祭

新鮮な感覚を備えた優れた現代詩の詩集に贈られる中原中也賞。今年はその贈呈式と中也の誕生日前夜祭をあわせて開催します。

4月28日(土) 14:00開演

・第12回中原中也賞贈呈式

・大江健三郎氏による講演

・大江光氏作曲の楽曲演奏

(中原中也の詩による新作の初演を含む)

・加藤舞踊学院による舞台公演「春日狂想」

サーカス小屋でコンサート

中原中也の詩「サーカス」にちなんで、大型サーカステントを特設会場として、コンサートや朗読会等を連日開催します。沢入マールイサーカス団によるオープニングアクトに始まり、豪華なゲスト達がパフォーマンスを繰り広げます。

会場：山口市中央公園横特設テント

4月29日(日・祝) 18:00開演 福島泰樹・友川かずき

4月30日(月・振休) 18:00開演 おおたか静流・友部正人

5月1日(火) 18:30開演 矢野顕子 guest 友部正人

5月2日(水) 18:30開演 谷川俊太郎・谷川賢作・深川和美

5月3日(木・祝) 18:00開演 ハナレグミ

5月4日(金・祝) 18:00開演 あがた森魚・田中泯

5月5日(土・祝) 13:00開演 詩のボクシング山口大会

5月6日(日) 18:00開演 佐々木幹郎・覚和歌子・Voice Space

中原中也生誕百年記念ナイト観光バスツアー

(湯田温泉宿泊客限定)

山口の名所を夜に巡ります。

4月13日(金)・14日(土)・20日(金)・21日(土) 20:15~22:00

●運行コース 湯田温泉—常栄寺雪舟庭—瑠璃光寺国宝五重塔—中原中也記念館

中原中也の会・秋吉台国際芸術村 日仏交流企画事業

日本とフランスの詩人によるパネルディスカッション、講演、コンサートなどを開催する予定です。

日程：6月2日(土)・3日(日)

会場：秋吉台国際芸術村

出演：宇佐美斉・鈴木和成・イヴ＝マリ・アリュー・

ジャン＝リュック・ステンメツ ほか

「生誕百年記念—“中原中也のつくり方” ワークショップ!!」+発表公演

日程：6月25日(月)～7月1日(日)

会場：山口情報芸術センター スタジオA

講師：森田雄三・イッセー尾形

朗読劇公演「“子守唄よ”—中原中也をめぐる 声と音楽のファンタジー」

日程：10月8日(月・祝) [山口公演]

10月21日(日) [東京公演]

会場：山口情報芸術センター スタジオA

サントリーホール 小ホール(東京都港区)

出演：小口ゆい(朗読女優)・

VOICE SPACE(東京藝術大学現代詩研究会)

中原中也記念館夜間開館

開館時間を延長し、夜7時30分まで入館、8時まで開館します。

日程：4月8日(日)～5月6日(日)

事業

中原中也と フランス文学

監修 宇佐美 斉



はじめに

中原中也はフランス文学、とりわけ象徴派の詩人たちの詩に傾倒し、創作の上でも大きな影響を受けました。第4回を迎えた常設テーマ展示では、その出会いから、ランボーをはじめとする翻訳の数々、詩作との関わり、そして近年のフランス語訳『中原中也詩集』の刊行に至るまで、中原中也とフランス文学との深い関わりの軌跡をたどりました。

I 出会い

京都立命館中学時代、ダダイズムの詩を書きダダさんと呼ばれていた中也は、上海から帰国した富永太郎と出会い、富永からランボーをはじめとするフランス象徴派の詩人たちの存在を学びます。中也とフランス文学との出会いに大きな役割を果たした富永太郎を、その没後に刊行された私家版『富永太郎詩集』とともに紹介します。

II 交友の中で

富永太郎を追うように上京した中也は、富永の紹介で小林秀雄を知り、その交友は河上徹太郎、大岡昇平らへと広がっていきます。彼らに共通していたのがフランス文学に関する知識であり、中也はアテネ・フランセや東京外国語学校でフランス語を学ぶなどしながら、フランス文学への造詣を深めていきます。彼らの共通の教養であったアーサー・シモンズ著岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』や中也が使用した仏和辞典などの展示を通じて、中也のフランス文学へ情熱を傾けた様子をご覧いただけます。

III アルチュール・ランボー

中也は生涯にアルチュール・ランボーの翻訳詩集を三冊残していますが、とりわけ野田書房から1937(昭和12)年9月に刊行した『ランボオ詩集』の「後記」ではランボーに対する深い共感を語っています。ランボーに対する深い共感を語っています。ランボーの代表作である「母音」、「幸福」の翻訳を、原書や中也の自筆草稿とともに紹介しながら、その特徴を探ります。

また、固定ケースでは、中也が京都時代から関心をもち、晩年に翻訳を完成させたランボー「酔ひどれ船」の世界を、七枚に及ぶ翻訳草稿と、様々な資料を組み合わせたパネルを通じて一望できるように構成しました。

IV ノート翻訳詩

表紙に(翻訳詩)と手書きされた「ノート翻訳詩」には、ランボーの他にもヴェルレーヌ、ネルヴァル、ヴィヨンなど、様々な詩人の詩の翻訳が書かれているとともに、創作詩や短歌

が書かれ、落書きにまで中也の個性が発揮されています。この「ノート翻訳詩」を通じて、中也における翻訳と創作の関わりを探りました。

V 翻訳家 中原中也

1929(昭和4)年以降、断続的にフランス文学の翻訳を発表し続けた中也は、詩人としてばかりではなく、ランボーを中心とするフランス文学の研究者として認められていきました。依頼されて『アンドレ・ジイド全集』第三巻に発表したジッドの詩「暦」や、ボードレールの「人と海」を「行かず翻訳しながら、自分の思いを語っていくエッセイ「海の詩」などを通じて、翻訳家としても活躍した中也の姿を浮き彫りにします。

VI フランスへ

2005(平成17)年、フランスの地でフランス語訳『中原中也詩集』が刊行され、中也が生涯を通じて憧れながらついにその地を踏むことになったフランスの読者へ、中也の詩が届けられました。フランスの日本文学研究家イヴ・マリ・アリュール氏による「サーカス」「二つのメルヘン」の二篇のフランス語訳を取り上げ、その特徴を紹介します。

全体はトリコロール(フランス国旗の三色である青、白、赤)をテーマカラーとして、ランボーやヴェルレーヌがアブサンを愛飲していた当時のカフェの雰囲気再現したコーナーなどを設けました。また、壁面には同じくトリコロールを基調としたカラーージュをさまざまながら、代表的な翻訳詩を映像展示しました。



青山二郎と 中原中也



展示1 「青山学院」と呼ばれた場

中也と青山二郎との出会いは昭和6年。青山は、当時骨董の目利きとして名を馳せると同時に、陶磁器の図録や雑誌の編集、文芸作品の発表に本の装幀と活動の幅を広げた時期でした。昭和5年には雑誌「作品」にも参加。同年に結婚した武原はんが世話をすることもあり、青山のもとには同人の文学仲間をはじめ多くの人が集い、お酒を飲んでは議論を交わして互いに影響を与え合いました。通称「青山学院」（大岡昇平による）。青山を校長に、評論家の小林秀雄や河上徹太郎を教授に見立て、学院メンバーは小説家の永井龍男や大岡、評論家の中村光夫の他、骨董屋に雑誌の編集者、女給など。女性では晩年まで交友のあった小説家の宇野千代、骨董の弟子入りをした白洲正子などいます。中也もそのメンバーの一人。青山の交友圏は中也の詩的な活動の基盤となりました。ここでは、「青山学院」の主なメンバーをご紹介しますとともに、中也が信頼を置いていた友人・青山の日記や友人宛の書簡などを通して、その交友をご紹介します。

青山は昭和8年9月から約9年間、四谷花園町（現新宿区）にあった木造二階立ての花園ア

パートに住みます。同年12月、新婚の中也も同アパートに引越し、約一年半を過ごしました。中也は青山の部屋を度々訪れて親交を深めたようです。

展示2 みる―多彩な活動

優れた画家が、美を描いた事はない。優れた詩人が、美を歌ったことはない。それは描くものではなく、歌ひ得るものでもない。美とは、それを観た者の発見である。創作である。（青山二郎「日本の陶器」）

青山は中学時代から絵画や骨董に親しみ、多彩な活動を行っていました。それらを五つのパートによってご紹介します。

民芸運動との関わり

大正末期に興った民芸運動は、それまで顧みられなかった民衆的工芸品―安価で量産される庶民の日用雑器の美を提唱した運動で、柳宗悦を中心に、陶芸家の浜田庄司、河井寛次郎、富本憲吉ら賛同者たちによって進められ、大正15年には「日本民芸美術館設立趣意書」が発表されました。表紙には青山所蔵の湯呑茶碗の写真が貼付され、また、資料の蒐集担当者としても名を連ねています。青山は初期民芸運動推進者の一人でした。大正13年には雑誌「山繭」を主宰していた石丸重治の叔父にあたる柳と頻繁に会っていたようです。さらに民芸運動の一環として刊行された「工芸」の創刊にも関わり、「蕨蛇記」「朝鮮考」などの美術評論を発表しています。その後、柳の思想に違和を感じた青山は民芸運動から離れていきます。

陶書

中学の頃に古美術商から高価な焼きものを購入し、店の主人を驚かせたという青山。その後、工学博士の大河内正敏や奥田誠一などを中心に東京帝国大学で開かれていた陶磁器研究会に通い、また李朝陶磁器研究家の浅川伯教^{なかに}なども親交を結んで陶磁器を観る眼を養いました。少年期から鍛えられた青山の「審美眼」の働きは、陶磁器に関する7冊の書物からうかがえます。陶器鑑賞の心得を記した「陶經」（昭和6年 二郎龍書房）、建築家・横河民輔が蒐集した東洋陶磁のコレクションの中から厳選して編集された図譜「甌香譜^{おうこうふ}」（昭和6年 工政会出版部）、倉橋藤治郎との共同編集で、彩童会所蔵のものを収録した図録「呉州赤絵大皿」（昭和7年 工政会出版部）などを紹介しました。

美術評論・エッセイ

青山の代表的な評論といえば「梅原龍三郎」と「富岡鐵齋」です。いずれも時間をかけて書かれたもので、小林秀雄、求龍堂出版の石原龍一とともに編集した「創元」に掲載されました。同誌は、詩や小説などの文学作品、美術評論、音楽についての評論を収録、本文二色刷、鐵齋や梅原の絵などを掲載しており、戦後の混乱期にありながら充実した内容で第二輯まで刊行されました。また、『眼の引越』（昭和27年 創元社）には、「上州の賭場」「小林秀雄」「中原中也の思ひ出」など、主要なエッセイを収録しています。

文芸創作

中学生の頃に沢山の量の作文を提出して先生を驚かせたという青山。石丸重治主宰の「山繭」で浜田庄司後援会を推進するとともに、「新



婚旅行「短い記憶」「ねびと」などの抒情的な小品を発表しています。河上徹太郎によると、その頃小林秀雄は「青山の文章には肉体があるから是非読め」と勧めたといえます。50代になると青山は、再び小説を書き始め、家族や友人たちをモデルにした「世間知らず」などを雑誌に発表。他にも草稿や、題名だけを書き記したノートなどがあり、創作にも力を入れていたようです。

装幀について

装幀といっても箱・扉・見返し・表紙のデザインその他、判型・紙質・活字の種類・組み方などがあります。青山は、こうした本の全体的なプロデュースを手がけていました。直木三十五『南国太平記』（昭和6年 誠文堂）を始めとし、『アンドレ／ジイド全集』（昭和9年／昭和10年 建設社）によって装幀家としての評価を受けたようです。青山の装幀の特色は、陶磁器の文様をもととした図案で、通称「本歌取り」と呼ばれます。また、小ささまざまな手彫りの木版を用いて新たな文様を作った他、独特な手描き文字も魅力の一つです。

身近の品々

老年になると青山は、長野や広島を訪れて、道具屋をめぐっては雑器の中から名品を見出したり、スキーやカメラ、ヨットに絵画と遊びの幅を広げます。青山の遺品の中から、青山が蒐集したそば猪口、中川一政の画室に通ったこともある再び描き始めた油絵、50代に入って凝り出したという写真を選んで紹介しました。

展示3 つくる—装幀の世界

「元来が余技である」といいながら、青山が

装幀した図書・雑誌は二千冊になるといいます。それらは友人や知人、つき合いのある編集者や出版社のものを中心に制作されました。その活動を友人達の著書とともに紹介しました。一番多いのは小林秀雄の著作です。『文芸評論』（昭和6年 白水社）を始めとして凝ったものが多く、青山所蔵の小林の献呈署名入り『無常といふ事』（昭和21年 創元社）には、新たに美しい彩色が施され、二人の友情の深さが伝わってきます。また、河上徹太郎の『道徳と教養』（昭和7年 タヴィット社）では、収録作品の編集にも携わり、よく売れ、同出版社の仕事が増えることになりました。その他、大岡昇平の『俘虜記』（昭和23年 創元社）、中村光夫の『二葉亭論』（昭和11年 芝書店）など、それぞれ小説家として、評論家として評価をうけた作品も手がけました。女性では宇野千代や白洲正子の作品など。宇野の設立したスタイル社刊行の本も手がけ、また、白洲の『私の芸術家訪問記』（昭和30年 緑地社）では、あとがきや文章にも手を加えています。出版社では編集顧問をしていた創元社との関わりが深く、その他、筑摩書房の創立者は自ら「青山学院」に入学しました。詩集としては、中也の詩集『在りし日の歌』（昭和13年 創元社）の他、「富永太郎詩集」（昭和16年 筑摩書房）や三好達治の『艸千里』（昭和15年 創元社）などがあります。雑誌としては、『文科』（昭和6年 春陽堂）、『文学界』（昭和13年／同23年 文圃堂書店他）、『日本映画』（大日本映画協会）など。いずれも「知つてゐる著者が知つてゐる本屋から、本を出す時が楽しくもあり、一番調子が出る。」（『装幀・造本・材料難』）という青山の姿勢がうかがえます。（K）

展示4 あそぶ—自在なる精神

「確信を以つて遊んで暮らすことが出来る人間は、僕だけだ。芸術は衣食の手段にするものではないし、僕の仕事ではない。」（昭和30年の日記より）と青山は語っています。この言葉にあるように、彼の多彩な活動はすべてが「余技」であり、純粹かつ真剣な「遊び」だったのです。その生き方はそのままひとつの精神として周囲の人々に影響を与えていたのでした。

展示では、陶器やその容れ物、スライドケース、日記帖や借金帖の覚え書など、様々な身の品々を紹介しました。それらは青山の手によって美しく彩色されていますが、一見まったく無駄なようで分類という実用的な目的を果たしています。

そして、こうした「遊び」の場の最たるものが書物でした。ドストエフスキーの作品や自らが装幀したもので、青山は愛着のある書物にはさらなる丁寧な彩色を施しました。また、バスカルやアラン、キリスト教関係の思想書など、おびただしい書き込みがある書物も多く残されています。それは讃辞であつたり、批判であつたり、時には他人の文章の添削であつたりと様々ですが、そこに青山の思索そのものが現れていました。その典型として、『梅原龍三郎論』の成り立ちを追って、真船豊「梅原龍三郎」への書き込み、美しく彩色された原稿「梅原龍三郎」の表紙、自著「眼の引越」への書き込みを展示しました。

展示5 青山二郎と中原中也

中也の酒の席での乱行は「青山学院」の中でも際立っていましたが、それが芸術家として

の矜持と孤独とに由来するものであることを青山は深く理解し、中也の面倒をよく見ていました。そんな青山に対して、中也は「三毛猫の主の歌へる」「月下の告白」の二篇の詩を贈っています。また、青山も「山羊の歌」の装幀にあたって、唐三彩小皿をあしらった表紙の図案を残しています。結果的に採用されなかったものの、この図案は後に自著「眼の引越」の表紙に使われており、いわば取って置き素材を中也に提供しようとしていたことがわかります。

こうした青山の友情は、中也が夭折した後さらに深まっていったといえます。遺稿となった『在りし日の歌』を出版する世話人となったのが青山でした。その後も、創元選書や創元社版『中原中也全集』の装幀など、中也の詩を世に送り出す役目を果たしたばかりでなく、晩年の日記や覚え書にまで中也の名前を見ることが出来ます。

展示では、青山に贈られた中也の詩の自筆原稿、「山羊の歌」表紙図案、青山の晩年の覚え書などの資料を通じて、中也と青山の魂の交流を浮き彫りにしました。（N）



【新収蔵資料紹介】

小林秀雄『ランボオ論』

(野田書房、昭和12年4月)



昭和5(1930)年、小林秀雄は、アルチュール・ランボオの作品を翻訳した詩集『地獄の季節』出版の際、過去に発表した2編のランボオ論を改稿し、序文としました。その序文をさらに改稿し1冊の本に仕立てたのがこの『ランボオ論』です。

総48頁と非常に薄い造りでありながら、確固たる存在感を醸しだしているのは、本の総てに出雲雁皮紙を使用しているところが大きいでしょう。出雲雁皮紙とは、出雲民芸紙の創始者である安部栄四郎(1902~1984)が広めた和紙のことで、『ランボオ論』も彼が漉いた紙を使用しています。安部は島根県八束郡岩坂村(現在の松江市八雲村)生まれ。少年時より紙漉の手伝いをして育ち、県の工業試験場に入ってから、機械製紙に圧倒され没落の一途を辿っていた手漉和紙を復興すべく研究につとめ、その技術を磨いていました。昭和6(1931)年、民芸運動の中心的存在であつ

た柳宗悦が、安部の漉いた雁皮紙を「これこそ日本の紙だ」と絶賛。それがきっかけで、のちに「出雲民芸紙」と呼ばれるようになる安部の紙は、全国的に知られるようになりました。版画家の棟方志功、陶芸家のバーナード・リーチも安部の紙の愛好者です。安部はそののちも和紙の研究と普及につとめ、昭和43(1968)年には、いわゆる人間国宝に認定されました。

『ランボオ論』に使われている紙は、厚口の雁皮紙で、柳が絶賛したのと同種です。あとがきには「本書ハ限定印行数四十九部。関西在住某氏ノ御好意ニヨリテ上梓サル」とありますので、一般にはほとんど流通しなかったと考えられます。定価の記載が無く、扉に「野田書房私販」とあるのも、あとがきにあるような事情からでしょう。なお、当館所蔵本には奥付に「25」と記番が印字されています。版元の野田書房は、「純粋造本」と呼ばれた限定本を数多く世に送り出した野田誠三の経営する出版社です。小林は『ランボオ論』上梓の2ヶ月後に「コロポオ叢書」(全12冊)の1冊として、ランボオの訳詩集『渇の喜劇』を同じ野田書房から出版しています。

ところで、中也の訳詩集である『ランボオ詩集』も、昭和12(1937)年の9月に野田書房から出版されました。また、表紙にヴェルレーヌの描いたランボオ像が配されているのも『ランボオ論』と同じです。中也が『ランボオ論』を読んだのは定かではありませんが、章番号「I」の原形である「人生断家アルチュール・ランボオ」(『仏蘭西文学研究』第1号、大正15年10月)を中原は小林から借りて読み「面白く読んだ。ランボオは僕に教へるよりも何よりも、「大乘」病を湧きたたす」との感想を小林に書き送っています(大正15年12月7日付書簡)。

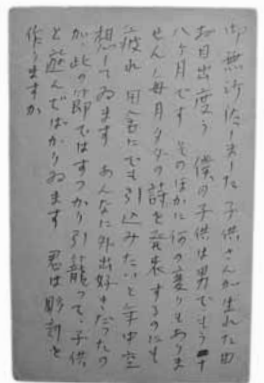
神保光太郎宛はがき

昭和12年2月28日

神保光太郎は昭和9年に「四季」同人となり、詩集『鳥』(四季社、昭和14年)、『冬の太郎』(山本書店、昭和18年)などを刊行した詩人です。

内容は鎌倉への転居通知で、中也は同じ内容のものを友人の安原喜弘や竹田鎌二郎などに送っています。前年に長男文也を亡くした中也は、そのショックで神経衰弱にかかり村古峡療養所で約一ヶ月半の入院生活を過ごしました。その後、退院した中也は文也との思い出の多い市ヶ谷から移りたいと思い、小林秀雄や大岡昇平など友人達の住む鎌倉で晩年を過ごすことになりました。

神保と中也は、大学卒業の頃、阿部六郎を通して知り合ったようです。中也が友人らと刊行した同人誌「白痴群」で作品を読んだ神保は「いとも古風に、当代の風景とは凡そかけ離れた世界のレトリックのうちで呼吸づいているように見えた。」(『中原中也のこと』)と書いています。



松田利勝宛はがき

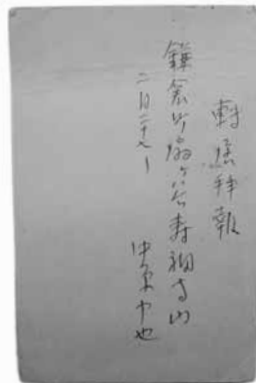
昭和11年4月12日

このはがきは旧全集編集後、行方不明となっていました。

松田利勝は彫刻家・高田博厚らの芸術家グループの一人で、彫刻家を志望。昭和5年に高田のアトリエで中也を知ります。昭和6年に郷里の北海道に戻り、翌年より放牧場の管理人をしていました。

はがきで中也は「毎月タタの詩を発表するのにも疲れ 田舎にでも引込みたい」「この節ではすつかり引籠つて、子供と遊んでばかりゐます」などといった感懐を述べています。

ところで、中也と知り合った当時の松田は、三鷹の牟礼にあった通称「赤い家」に住んでいました。「赤い家」とは、「互いに自分の仕事をし、なるべく少なくて働いて食べる」(高田博厚「分水嶺」)共同生活を目指した一種の理想郷で、中也もしばしば訪れていました。中也は、そこでの人々との交流をモチーフにした散文作品を書いています(『無題』(の上)、画家の)。作品中に登場する「Mさん」が松田をモデルにした人物と考えられます。中也は、「Mさん」を「北海道の熊」との異名を持つ、豪放な人物として描いています。一方、松田はのちに、中也の印象をこう記しています。「彼はその頃よく、どこかで、誰かと喧嘩してきた。眼の開りが、あおぐろく腫れ上がったこともあった。そんな彼に一種のいたわりを持っていた。彼の詩についても、何か昇華するものが感じられた。」(『思いだすこと』)



詩集の記憶

水無田氣流

中也の詩集を始めて買ったのは、中学一年生のときだった。大岡昇平編の岩波文庫版であったと思うのだが、実は「中原中也の文庫」は、角川文庫版と白鳳社版も持っており、どれを最初に買ったものか、今となっては不明である。

ともかく、読み終えて読書仲間のSちゃんに貸したことだけは確かだ。彼女が中也と交換で貸してくれたのは、寺山修司の『家出のすめ』だった。

Sちゃんは、名前の二つある女の子だった。両親はTとつけるつもりが、出生届を提出した祖母が、読み方を間違えてSと読み仮名を振ってしまったのだという（しかも、間違えて提出したことすら忘れて帰ってきた）。このため、彼女はかなり大きくなるまで、自分はTだと思っただけで育った。

「どっちでも、好きなほうで読んでね。どっちでも、返事をするから」

自己紹介のとき、そう言っただけで彼女は笑った。笑うと口元にくっきりとえくぼができる、可愛い子だった。丸顔と大きな目によく似合う丸眼鏡をかけ、髪を耳の下で潔く揃えていた。



彼女と本を交換するのは、いつも屋上事前の踊り場だった。屋上へ続く扉はいつも施錠され、昼間でも薄暗かった。天井の上は給水タンクで、よどんだ水の臭いがしていつも湿っぽかった。だが、昼休みに教室に残っていると、いつも男の子たちが雑巾を丸めてボールに見立て、野球やサッカーの真似事をしたり、プロレスごっこを始めたたりする。埃がたつ上、うるさくてかなわなかったため、昼休みの教室は苦手だった。

いつからこの場所に集まり、どちらからともなく本を貸し借りするようになったのか分からないが、とにかく、三年間ほぼほぼひっきりなしに本を貸しあった。そのうち、彼女はぼつんぼつんと自分の話をするようになった。一人っ子であること、父親と叔母の三人暮らしであること、母親は身体が弱くてずっと入院していること。たまに外出許可が出て家に帰ってきた母親は、「じゃあ、そろそろ帰るわね」と言っただけで病院に帰るのだ、ということ。

「ここが家なのに、変よね」

と、彼女は言った。そのときも、やはり彼女はえくぼを作っただけで笑っていた。私は、何と答え

たのだろうか。覚えていない。

そのうち、彼女の家にも遊びに行くようになった。彼女の部屋は、母屋と叔母の住む別棟の間をつなぐ場所にあった。玄関にはいつも鍵がかかっていた。私は窓から彼女の部屋に入り込んでいた。初めて彼女の部屋を訪ねたとき、「いらっしやい」と声はしたが、姿が見えない。驚いて見回すと、部屋の中央に置かれたグランド・ピアノの下から、彼女が事もなげに顔を出した。

「いつも、ここに寝ているの」

と、彼女は言った。ピアノの下には、子供用のマットレスが置いてあった。ちょうど、小柄な彼女がすっぽり入る「寝床」で、「ここが一番落ち着くの」と言っただけで、彼女は笑っていた。

十二畳ほどある部屋だった。机はなく、「ピアノの上で勉強しているの」と彼女は言った。壁はほぼ本棚で埋め尽くされ、本や楽譜がふんだんにあった。濹澤龍彦や、伊藤比呂美を最初に読んだのは、この部屋だったように記憶している。雑多で、多ジャンルがひしめいた本棚だった。筒井康隆（彼女は中学生のとき筒井康隆にハマり、高校生で高橋源一郎にハマっ

ていた）やハヤカワのSF文庫がごろごろあり、『ビックリハウス』等の雑誌も並んでいた（当然、戸川純のレコードもあった）。仕事で不在がちな父親が、母親もほとんど家にいない彼女を不憫に思い（「私、ふびんに思われているの」と彼女が言っていた）、何でも買ってくれるらしかった。

いつも調律の行き届いたグランド・ピアノ（とても、いい音がした。うっとりした）と、大量の本や雑誌があり、夢のお城のような部屋だった。彼女は、巨大音楽教室のジャズピアノ科に在籍していて、編曲が得意だった。同じ音楽教室の作曲科にいた私は、旋律を作るのは好きだったが編曲が苦手で、よく宿題を手伝ってもらった。

中学を卒業し、別々の高校に進学した五月、彼女の母親が亡くなった。通夜に行くと、弔問客たちが泣き騒ぐ中、座敷の一番奥、棺のすぐ脇に座った彼女だけ、泣いていなかった。彼女は、紺の制服に臙脂のリボンを引き締め、端然と正座していた。口元は静かに引き上げられ、微笑んでいるようにも見えただけ、例えくぼは、浮かんでいなかった。

彼女とは、その後も親交がある。今では彼女も、二児の母である。けれども「中也の詩集」というと、必ず中学生の彼女が想起される。そして一連の記憶は、手練り寄せると彼女の母親の通夜まで到達する。いつも彼女の横顔と、それを映し出す行灯の白い光までたどり着く。だが、そこから先が、ふつつり途絶えている。

（平成18年度企画展「第11回中原中也賞」のための書き下ろし）



企画展Ⅱ



中原中也・詩の情景／絵画の情景

あゝ？——山根秀信展

平成18年9月27日(水)～12月17日(日)

山 口市在住の美術作家・山根秀信氏とのコラボレーション企画。2階展示室は、中也の詩の世界と山根氏の絵画の世界が織りなす新しい表現空間となりました。

詩「月」と絵「オブジェー月」。詩「木蔭」と絵画「オブジェー風景」。詩「悲しき朝」と絵画「鳴滝」。詩「冬の長門峡」と絵画「冬の長門峡」。これら作品は、それぞれを読み、眺めた者の内部で互いに影響し合い、個々の作品の別の表情を引き出してくれました。言葉の世界と視覚の世界が五感の全てまで刺激するかのようでした。

山根氏の絵画には人間も動物も描かれず、夜の駐車場、昼下がりの公園、天体望遠鏡で見た月、街角のコンクリートやアスファルトなどが、写真のように正確に、けれど湿気を帯びているかのような柔らかいタッチで、風景として描かれていました。そこに、中也の心象を表現する、肉感的な、切実な、詩の言葉が入り込んでいくのです。

山根氏には、11月18日(土)と12月9日(土)の二日間、ギャラリー・トークを行っていただきました。山根氏が描くのは(無機質な風景)、中也の詩には情念が盛り込まれている。その対比を見て欲しかった、とのこと。企画展タイトルを「あゝ？」にしたのも、中也の詩「冬の長門峡」の「あゝ！」「そのやうな時もありき」からとったもので、現

代の私達にこのような深い嘆息ができるだろうか、という問いを込めたことでした。今回の企画展のために制作された「冬の長門峡」と「鳴滝」のシリーズは、水の流れを描きつつ、すべてマゼンタ色(赤紫色)で塗られており、フィルターをかけた効果を意図されたとのこと。作家本人の意図がどのように表現され、見る側はどう受け取るのか、多くの参加者から質問を受け、その応答からも興味深いお話を沢山聞くことができました。

自然を見る眼も人工物を見る眼も、非常に無感情に捉えているようでありながら、肯定するでもなく否定するでもなく、ひたすら見つめている画家の、優しい眼差しが感じられる絵画でした。洗練された構図と落ち着いた色遣い、少し寂しさを感じさせる風景を見ながら、中也の詩の言葉をあらためて読むと、中也の声が現代に、よりいっそうはつきりと響きわたっているように感じられました。

山根秀信氏：一九五九年、山口市生まれ。静かな作風で知られる美術作家。

企画展Ⅲ

日本のダダ

Pick up!
企画展ピックアップ

平成18年12月20日～平成19年4月15日

ダ ダは、第一次世界大戦中の1916年、スイスのチューリッヒに集った芸術家たちが始めた反芸術運動です。ダダはこの世の規範や価値観、意味という意味全てを否定・解体し、ヨーロッパの芸術界を喧嘩と狂乱の渦に巻き込みました。ダダは世界各地に広まり、日本の詩人や

画家たちにも多大な影響を与えました。中原中也も影響を受けた一人です。本展では、日本におけるダダ、そしてダダと中也の関わりを中心に、文学のみならず、パフォーマンス、ファッションなどの視点も交えて紹介しました。また、ただ展示を見るだけでなく、複製版を手にとりて読んだり、

西欧のダダ作品の朗読を聴いたりして、より多面的なアプローチができるように工夫しました。

12月20日、オープニングイベントを開催。書家でミュージシャンの西村始梨氏による、展示室入り口に掲示する題字を即興で書くパフォーマンスが行われ、注目を集めました。

1 中也のダダ

大正12(1923)年、16歳の中也は、高橋新吉の詩集『ダダイスト新吉の詩』と出会い、その独特な表現に感化された作品をノートや手帖に書きはじめ——中也のダダ詩はこうして始まったとされています。それらの中で、現在私たちが目にすることが出来るのは、表紙に「1924」と書かれた1冊のノートだけです。ここでは「ノート1924」の詩篇を中也の自筆で読めるよう、ノートの写真をコピーしてファイルに綴じた写真複写版を展示するなど、中也のダダ詩を語る上では欠かせない「ノート1924」を中心に紹介しました。

2 ダダってなんだ？

日本で最初にダダが紹介されたのは、当時発行されていた新聞『万朝報』(大正9(1920)年8月15日附)に載った二つの記事です。高橋新吉はその記事に衝撃を受け、ダダの詩を書き始めたといえます。高橋や辻潤らによって始まった日本のダダは、大正12(1923)年頃を境に急速に広まります。ここでは、高橋新吉、萩原恭次郎、吉行エイスケらの活動を「赤と黒」や「売恥醜文」などの雑誌を通して紹介しました。また、前衛芸術家グループ「マヴォ」を取り上げ、これまで看過されるくらいがあった集団としてのダダの可能性にもスポットを当てた展示にしました。

3 ダダの身体

中也18歳頃の肖像写真、お釜帽をかぶったおかつぱ頭の写真は有名ですが、実はあの格好から中もとダダとの関わりが見えてきます。キャバレー・ヴォルテールの舞台がダダの始まりに重要な役割を果たしたように、西欧のダダとパフォーマンスは深い結びつきがあります。また、あまり知られ



ていませんが、日本でも、「マヴォ」や「劇場の三科」といったグループがパフォーマンスを行っています。ここでは、村山知義がおかつぱ頭で踊っている写真や、無意味な言葉を歌詞とした「マヴォ団歌」を通して、ダダをファッションやパフォーマンスの視点から紹介しました。

4 中也と同時代芸術

——富永太郎の書簡を手がかりに——
中也がダダと出会った頃、すなわち中也の京都時代に書いた日記や書簡は今ほとんど残っていません。一方、京都時代の友人、富永太郎が同時代の芸術に興味を抱いていたことは、残された書簡からよくわかります。ここでは、富永太郎の書簡を通して、中也を含めた当時の芸術家志望の若者たちが体感した芸術文化を紹介しました。また、CD試聴コーナーでは、西欧のダダイストたちが行った同時進行詩(3人が同時に異なった言語で別々の詩を朗読する)など、ダダに関連する朗読や証言が収録されたCDを聴くことができます。

5 日本のダダ／中也のダダ—その後

大正13(1924)年頃、日本におけるダダ運動はピークに達し、それから後は急激に下火になっていきます。関東大震災にともなう混沌が生んだダダの流行は、秩序が回復するとともに消えていったというのが一般的です。しかし、そのような単純な評価では語り尽くせない可能性がダダにはあったのではないのでしょうか。大胆にいえば、ダダは伏流となって彼らの中に流れ続けたのです。ここでは、坂口安吾のファルス文学とダダの関係、中也の芸術論に登場する「名辞以前の世界」とダダの関係などを通して、日本のダダ、中也のダダのその後を追いました。

皇太子さま、中也記念館に。

福田百合子



平成18年秋は、山口県で国民文化祭が開かれ、全国からの人々で賑わいました。特に中也記念館では、開会式当日の11月3日に皇太子

殿下がお立ち寄りになるとのことです。お迎えの準備に追われ、大変でした。県警や宮内庁の警戒態勢が厳重で、早くから館内外の隅々までの点検など、人の出入りも頻繁を極め緊張感に溢れる時を過ごしました。にも関わらず、ご案内の私自身が不注意のため、足首骨折の椅子では余りにもご無礼かと悩み抜きました。が、どうしても……と、病院から駆けつけると

皇太子さまは、にごやかに、おだやかに館内へ進まれました。中原副館長のご先導で、途中から、車椅子のまま、ご説明をさせていただくことが出来て、本当に感動致しました。

事前に県知事から、新編の中也全集が届いていた由、実に深く読み込んでおられ、質問というより、ご意見を述べられる姿勢に終始されました。例えば、年譜の京都の個処では、「小

林秀雄の下へ去った長谷川泰子との出会いの時ですね」とか、「骨」という作品は、中也の家が医院で、外科室もあり、骨には親しみがあったのでは？」など、積極的に語られるのです。この日の為に特別展示した「新文芸日記」を熱心に覗き込まれ、「精神史・哲学誌ですね」とうなずかれました。中也1歳4ヶ月のポスターの前で報道陣がカメラを構えた瞬間、思わず「車椅子から立ち上がったのもよろしいでしょうか」と申し上げますと、なんと皇太子さまは、「どうぞ。大丈夫ですか」と手をさしのべられたのです。

後の懇談会で「秋田駒ヶ岳から下山の際の怪我」と知られ、皇太子さまは「私もよく登りました。秋草の美しい山ですね」とお答え下さったのです。嬉しさを一杯でした。

皇太子さまに手を採られた写真は門外不出ですが、中也へのご造詣の深さとお人柄のあたたかさを、是非知っていただきたく、書き留めました。

「子守唄」や、中也の短歌、音楽性などにも興味を持たれたご様子で、その中広い知識と豊かな感受性を十分にお示しいただいた貴重なひとときでした。

皇太子殿下の中也記念館への行啓がつつがなく終了しましたことを、ご協力の皆様方に心より感謝申し上げます。ご報告と御礼を兼ねさせていただきます。有難うございました。

第21回国民文化祭・文芸祭 「現代詩」朗読詩大会授賞式

2006年10月、山口県で第21回国民文化祭が開催され、芸術に関わる数多くの事業の中で、山口市では、中也の「帰郷」の一節「さやかに風も吹いている」をサブテーマに、文芸祭「現代詩」が行われました。国民体育大会と同様に毎年各県をめぐっていく国民文化祭ですが、山口市の実行委員会では文芸祭「現代詩」の中に初めて「朗読詩」という分野を設けて、自作の詩を朗読したテープやMDを募集しました。これは中也生誕90年祭やそれを引き継いだ「空の下の朗読会」などで実績を積みできた朗読詩の伝統を、国民文化祭の場で生かそうという試みであつたわけです。

小学生の部、中学生の部、高校生の部、一般の部の三部門に全国から178篇の応募があり、記念館の運営協議会委員を務めていただいた詩人の佐々木幹郎さんと長谷部奈美江さん、副館長の中原豊が審査にあたって、21篇の入賞作品を選びました。

その授賞式は11月5日に記念館の前庭で行われました。例年4月に開かれる生誕祭の「空の下の朗読会」と同じ場所です。好天に恵まれ、秋晴れの空の下で、まずは関連事業として中原中也賞受賞詩人の和合亮一氏による詩作ワークショップが開かれました。参加した小学生のみなさんは、和合先生にリードされながら詩を作る楽しさを体験し、最後にその場で出来上がった作品の朗読発表会をして締めくくったのでした。

続いて、表彰式と受賞者による自作朗読です。それぞれの部門に文部科学大臣賞を筆頭に13の賞が設けられていたのですが、各賞毎に小学生、中学生、高校生の順に朗読されました。「朗読詩」の場合、詩そのものだけではなく、その朗読も含めた全体が「作品」であるわけです。同日の午前中から山口県総合保健会館を会場として開かれていた「現代詩大会」の参加者も加わった聴衆の前で、受賞者は次々に朗読していきます。緊張気味だったり、気持ちよさそうだったり、パフォーマンスとしては様々でしたが、審査委員を代表して選評を述べられた佐々木さんがおっしゃっていたように、小学生の受賞者のみなさんののびやかさには、大人の受賞者の工夫された、あるいは鍛えられた朗読も少々押され気味でした。最後に佐々木さんと、和合亮一ご夫妻の自作朗読で朗読詩大会は幕を閉じました。

「サーカス」「汚れつちまつた悲しみに……」などの自作を朗読していた中也にふさわしい試みでした。山口県で開催される国民文化祭は終了しましたが、朗読詩大会はこれからも継続していくという計画があります。「山口を朗読のメッカに」というのが生誕90年祭の締めくくりの言葉でしたが、生誕百年を迎える今年、それが実現に近づけば嬉しいと思います。

4月18日	企画展Ⅰ「第11回中原中也賞」(～7月23日)				
28日	第23回中也を読む会「春の日の夕暮」				
29日	生誕祭 空の下の朗読会 (於 記念館前庭) 自由参加の朗読(朗読参加者21名) ポエトリーリーディング ライブ(伊藤 比呂美)				
	生誕祭 空の下の朗読会				
	第11回中原中也賞贈呈式 (於 ホテルニュータナカ) 主催:山口市 受賞詩集 水無田 気流 『音速平和 sonic peace』(思潮社)				
	記念講演『「ニッポンの詩」と『ニッポンの小説』』 講師 高橋 源一郎				
	第10回中原中也賞英訳本贈呈 MISUMI Mizuki『Overkill』				
30日	中原中也記念館運営協議会				
5月18日	生誕百年記念切手発売				
26日	第24回中也を読む会「臨終」				
6月10日	中原中也の会第10回研究集会 主催:中原中也の会 (於 日本近代文学館)				
23日	第25回中也を読む会「少年時」				
7月26日	特別企画展「青山二郎と中原中也」(～9月24日)				
28日	第26回中也を読む会「寒い夜の自我像」				
8月12日	特別企画展プロムナード・トーク(及び 9月17日)				
25日	第27回中也を読む会「雪が降つてゐる……」				
26日	公開講演Ⅰ「青山二郎の生涯と交遊」 講師 森 孝一 (於 山口情報芸術センター)				
31日	機関誌「中原中也研究」第11号発行				
9月9日	中原中也の会第11回大会 主催:中原中也の会 公開講演Ⅱ (於 ホテルニュータナカ)				
					「青山二郎、富永太郎のことなど」 講師 窪島 誠一郎
			10日	中原中也の会第7回セミナー 主催:中原中也の会 (於 ホテルニュータナカ・ 中原中也記念館)	
			22日	第28回中也を読む会「いのちの声」	
			27日	企画展Ⅱ「中原中也・詩の情景／絵画の情景 あ?—山根秀信展」(～12月17日)	
			10月1日	公開講演Ⅲ (於 山口情報芸術センター) 公開対談「詩のことば・詞のことば—中原中也と山頭火」 講師 辻田 昌次、中原 豊	
			22日	中也命日・お墓参り	
			27日	第29回中也を読む会「いちじくの葉」	
			11月3日	国民文化祭 皇太子殿下行啓	
			5日	国民文化祭 文芸祭「現代詩」朗読詩大会 (於 記念館前庭)	
			6日	中原中也記念館運営協議会	
			18日	企画展Ⅱギャラリー・トーク(及び 12月9日)	
			24日	第30回中也を読む会「骨」	
			12月20日	企画展Ⅲ「日本のダダ」(～H19年4月15日) オープニング・イベント (於 2F展示室)	
			12月22日	第31回中也を読む会「含羞 ^{ほぢらひ} 」	
			1月26日	第32回中也を読む会「一つのメルヘン」	
			2月16日	第4回常設テーマ展示「中原中也とフランス文学」 (～H20年2月17日)	
			24日	企画展Ⅲプロムナード・トーク(及び3月10日)	
			26日	第33回中也を読む会「言葉なき歌」	
			3月23日	第34回中也を読む会「冬の長門峡」	
			31日	館報第12号発行	

中原中也の会

6月4日	中原中也の会第10回研究集会 (於 日本近代文学館) テーマ「富永太郎と上海」 講演「富永太郎がみた上海」 講師 張 競 講演「そしてパリへ —金子光晴の都市表象と30年代邦人租界」 講師 今橋 映子 講師によるトーク及び質疑応答 司会 佐々木 幹郎	9月10日	中原中也の会第11回大会 (於 ホテルニュータナカ) テーマ「詩人と絵画」 講演「青山二郎、富永太郎のことなど」 講師 窪島 誠一郎 アトラクション コーラス隊“h·u·g!”(合唱) 対談「陶の浪漫」／「装幀と美術」 講師 三輪 休雪／菊生 吉生
7月30日	会報第20号発行	11日	中原中也の会第7回セミナー 特別企画展「青山二郎と中原中也」探訪 講師 中原 豊、古賀 晴美 (於 ホテルニュータナカ・中原中也記念館)
		12月25日	会報第21号発行

◎第12回中原中也賞

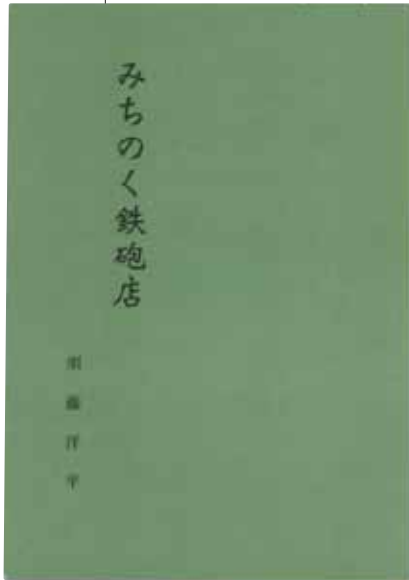
『みちのく鉄砲店』

(私家版)

すとうようへい
須藤洋平氏



Chuya Nakahara
prize



第

12回中原中也賞は252詩集の中から『みちのく鉄砲店』が選ばれました。2月17日に中也ゆかりの西村屋旅館(結婚式を挙げた場所です)で選考された、最終候補詩集7冊のうち唯一の私家版でしたが、様々な受賞歴のある他の著者の詩集を抑えて受賞されました。

須藤氏は1977年、宮城県生まれ。受賞時30歳です。トゥレット症候群と診断され現在は闘病生活をされています。3年ほど前に谷川俊太郎さんの詩に出会い感銘を受け、詩を書き始められたとのことで、2006年9月に出版されたこの詩集が第一詩集です。

最終選考会では(障害をもった身体が引き起こす孤独を引き受け、その病気の強い作用に負けない、人間としての感応力の強い詩の世界を展開している。)と評され、表現としてのレベルの高さが評価されました。

頬の痛み

「無償の愛」を敷いて
その上で寝ころんでみる
頭の中で僕を蝕む

思い出たが

苦しみから経験に変わり

心地好いそ風に流されてゆく

それでも我が者顔で「でん」と

あぐらをかいた大きな傷もある

僕はそれらと柔らかに足を絡めあう

そして僕はあなたにしなやかに拘束され

四の五の言わずとも慰撫される……

その時

泣き叫びながら

何度も強く頬を引っ叩く者がいる

遠のく意識の中で思った

無償の愛なんでものは

この世にあるわけがない

でもそうだとしたら

この頬の痛みを僕は何に例えようかと

ことはそのものを他の意味にずらしたり、饒舌なようにして空虚な内面を表現したりするものが多い現代詩の中で、須藤氏は真っ直ぐなことで詩の世界を創り上げています。(人間としての感応力の強い詩の世界)を、これからも産みだしていられることを期待しています。

◎平成19年度 記念館関連行事予定

2007年4月-2008年3月

4月8日	生誕百年祭イベント(～5/6)	5月30日	企画展2「収蔵資料展」(～7/22)	9月9日	中原中也の会第8回セミナー (於 ホテルニュータナカ)
4月17日	企画展1「第12回中原中也賞」 (～5/27)	6月2日	中原中也の会 第11回研究集会 山口会場(～6/3) (於 秋吉台国際芸術村)	9月27日	企画展3「私の好きな中也の詩」(仮) (～12/16)
4月28日	第12回中原中也賞贈呈式 (於 山口市市民会館)	7月25日	特別企画展「小林秀雄と中原中也」 (～9/24)	10月22日	中也命日・お墓参り
4月29日	百年祭 空の下の朗読会 (無料開放日)	9月8日	中原中也の会第12回大会 (於 ホテルニュータナカ)	12月19日	企画展4「中也の住んだ町(京都)」 (～平成20年4月下旬)
5月5日	こどもの日(無料開放日)			平成20年(2008)2月	第5回常設テーマ展示「友情」(仮)

*日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第12号】平成19年3月31日 表紙写真 | 中也1歳4ヶ月(1908年8月)の肖像写真 中国・柳樹屯の写真館にて

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には古紙配合率100%の再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。